

(実践事例)

法学部「プレップセミナー」における
スチューデント・アシスタント(SA)の試み

伊藤 琴音・吉永 一行

高等教育フォーラム 第3号抜刷 平成25年3月

法学部「プレップセミナー」における スチューデント・アシスタント (SA) の試み[†]

伊藤 琴音*・吉永 一行**

京都産業大学法学部3年次*

京都産業大学法学部**

法学部准教授、吉永の担当する1年次春学期開講プレップセミナーでは、2012年度に学期を通じて同じ学部の3回生の学生がスチューデントアシスタント(SA)として1年生をサポートするという試みを行った。

法学部では2013年度秋学期よりSAを育成するための演習授業を開講し、2014年度からプレップセミナーにおいて正式にSAを導入することとしている。そこに向けて本稿は、試験的に行われたSA活動について、具体的な内容、また活動を通じて明らかになった課題について記述したものである。

キーワード: 専門教育、学生支援、スチューデント・アシスタント(SA)

1. はじめに

1.1. 本レポートの内容と構成

京都産業大学法学部では、1回生春学期の専門教育科目としての「プレップセミナー」(2単位)を開講している。700人近い新入生を、30人弱のクラスに分けて初年次教育を行っている。

平成24年度、このプレップセミナーのうち吉永が担当するクラス(「吉永プレップ」と呼ぶことにする)において、法学部3年次に所属する学生にスチューデント・アシスタント(以下ではSAと呼ぶ)として参加するもらう試み(半ば偶然の形で)を行った。後述の第2章(「2. SA活動に入るまで」)から第6章(「6. むすび」)において、SAを務めた伊藤自身がその活動報告を行う。伊藤は後述の通り授業サポートについて研修を受けた経験があるので、彼女自身にSAとしての活動を語ってもらったこのレポートは、適切な知識に裏付けられた貴重な資料となるはずである。

伊藤からの報告に入る前に、以下引き続きこの第1章の中で、彼女にプレップセミナーのSAを引き受けてもらった経緯を説明し、さらに吉永プレップの授業の概要を説明することとする。

1.2. SA採用にいたる経緯

今回、吉永プレップでSAとして活動し、このレポートの2章以下を執筆する伊藤琴音は、平成24年現在、法学部3年次に在籍している。1年次のプレップセミナーは、

吉永の担当するクラスに在籍していた。

伊藤は、プレップセミナーでSAとして活動するのと同時期に、同じく1回生春学期開講のキャリア形成支援科目「自己発見と大学生活」で、キャリア教育科目担当学生ファシリテータ¹⁾(「キャリアファシ」と略称される)として、授業のサポートを行っている。キャリアファシを務めるためには、ファシリテーションに関する知識と技能を身につけるための研修を受ける必要があり、伊藤もその研修を受けている。(吉永プレップは、その研修にフリーライドしたことになる)。これとは別に、2回生の時には、大学の授業改善を目的とする学生組織である「学生FDスタッフAC燦²⁾」に加入している。

伊藤がSAとして授業に参加することとなったきっかけというのは、この「燦」の活動をさらに活発にするために、吉永プレップの中で新入生に対して広報をしたいという伊藤が依頼してきたことに端を発する。相談を重ねるうちに、単に1回だけ授業に来てPRをするのではなく、アシスタントとして継続的に授業に参加してはどうかという話になった。伊藤の方はもともと授業改善や学生サポートに興味をもっていたわけであるし、吉永の方でも、学生が学生をサポートするというピアサポートにはもともと関心があったからである³⁾。こうして、上級生がSAとして新入生対象のプレップセミナーに参加し、学生のサポートを行うという試みが、吉永クラスだけの全く私的な(そして無償の)試みとして始まったのである。

1.3. 吉永プレップの授業概要

平成24年度の吉永プレップでは、4月13日を第1回授業とし、春学期の間15コマの授業を行った。5月上旬までは吉永プレップ単独で、5月中旬以降は法学部の深尾正樹准教授の担当するクラスと合同で授業を行った。伊藤には、(深尾先生の了解も得た上で)この合同クラスにおいてもSAとして活動してもらい、その際は吉永プレップの学生と深尾プレップの学生とを区別することなくサポートにあたってもらった。

授業は教員からの一方的な講義とならないよう、毎回、授業の中で様々な課題に取り組んでもらうこととしている。授業はおおむね最初の3分の1ほどを課題の説明などにあて、残りの時間で受講生に課題に取り組んでもらう。受講生は3人ほどでグループを組み、相談しながら課題を進めて行く。

こうした授業の中で、伊藤にSAとしてどのように活動してもらったのかということについては、その際にどのようなことを心がけたかということも含めて伊藤自身から報告してもらおうこととする。以下、伊藤に筆を譲ることとする。

2. SAの活動を始めるにあたって

吉永先生からご紹介いただいた通り、私は、大学の授業改善を目的とする学生組織である「学生FDスタッフAC燦」に所属するとともに、キャリア科目担当学生ファシリテータ(キャリアファシ)を務めている。そうした活動の中でいつも考えていたことは、「授業が受講生にとってさらにプラスになるような働きかけをしたい」とか、「受講生が授業に常に積極的に取り組めるような支援に取り組みたい」ということであった。

こうした活動を経験したことから、SAとしてプレップセミナーをサポートするというお話を受けたときに私は、次のような思いを抱いていた。

学生は、大学という1つの「場」、それも高校までとは全く違った場で4年間を過ごす。そこではすでに1人の大人として扱われ、4年後には大半の学生は社会の一員になる。しかしながら、そのような助走の4年間の中で、いつまでもきっかけが掴めずにつまずいて、将来の進路にまで大きく影響してしまうこととなる学生が少なからずいるように感じている。

特に法学部は専門性が高く、1年生の時点でつまずいてしまう学生もいる。そうした学生をどのように支援すれば効果的であろうか。

そのような問題意識の下で私が考えたことは、1年生

の初年次教育の中で、受講生にとって担当教員よりも近い存在となる「先輩」が後輩たちをサポートするということであった。

3. 取り組みの紹介

3.1. SAをするうえで心がけていたこと

SAを行う上で心がけていたことは、SAとしての立ち位置である。私は、授業の補助あるいは授業担当の先生の補助ということに重点をおくのではなく、キャリアファシと同様に、法学部で2年多く経験を積んできた「先輩」として、受講生のサポートをするという立ち位置でサポートを行うようにした。

また、私自身が持つ法学の専門知識を後輩に教えるというのではなく、キャリアファシ研修を通じて学んだファシリテーション(場の促進)に関する知識の方をフルに活用して活動にあたった。

3.2. 主な活動

プレップセミナーにおけるSAの仕事は、主に次の2つであった。

まず授業の初め30分ほどは、先生が前週の課題についての講評や、今週のグループワークについての説明をするので、その間、その内容をパソコンに入力し、プロジェクターで教室に投影した。これには、京都産業大学に導入されているオンライン学習管理システム(LMS: Learning Management System)であるmoodle(ムードル)のチャット機能を利用した(図1)。

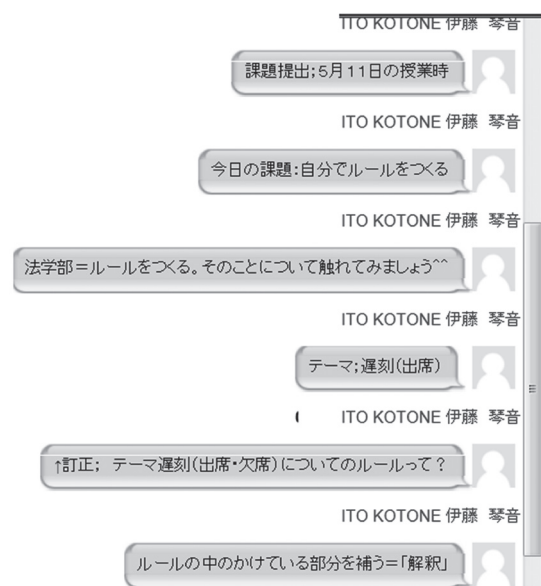


図1. moodleでのチャット機能

この活動には、1つには、聴覚障害をもつ受講生(もちろん大学の正規のサポートがつくのだが)の役に立てばという意図があった。さらにもう1つ、入力に際して、単に先生の言ったことをそのまま打ち込むのではなく、一先輩としての意見や考えなども盛り込むことで、受講生の興味をよりかきたてられるのではないかという狙いもあった。

授業の残りの1時間ほどは、グループワークの形で進められ、先生が教壇に立って説明するということはほとんど行われなくなる。この間は、常に教室内を歩き回りながら、各グループ、とりわけ上手く進んでいないグループに声をかけ、ワークへの取り組みを促したり、質問を受けたり、アドバイスを与えたりといったことを繰り返した。

3.3. グループワークのサポート

このうち後者の、グループワークのサポートについて、もう少し詳しく述べていきたい。

もっとも気をつけていたのは、グループに声をかける手法である。受講生に掛ける言葉は、たとえやる気が伺えないなどとしても、「早くやりや」とか、「何してんの？」などといった頭ごなしに注意をする言葉を使わないというのが鉄則である。「大丈夫」「わかる？」などの言葉を選んで、まず相手に同調して否定的な言葉をかけないようにした。

また、状況に応じて、グループ1人に絞って話しかけたり、グループ全体に話しかけたり、方法を変えて対応した。例えば、グループの中で1人だけ溶け込めていない受講生がいるときに、その受講生に「みんなの話をわかるー？」などと声をかける。それを通じて、グループのほかのメンバーにも、状況を把握できていないメンバーがいることを理解させ、ワークが上手く進むように促す、といったことを行った。

特定のグループばかりに声をかけるのではなく、どのグループにも必ず1回は声をかけるようにし、グループの状況を聞き、見守ることも重要である。

今回、SAとしての活動で最も難しかったところは、法学部の専門知識に関する質問への対応であった。質問があったときには、答えを教えることなく受講生の学習をサポートする必要がある。例えば、民法で「法律行為」とは何かと質問されたら、「意思表示を構成要件とする法律要件で……」などと答えを教えるのではいけない。「買い物に行って、商品を手にとったとして、それを自分のものにするためにはどうする？」という、わかりやすい具体例を挙げて、受講生自身に考えさせるようにしないとイケな

い。しかし、身近な事例をすぐに思い浮かべたり、噛み砕いた説明をするのは難しく、できないことも多々あった。

4. 受講生からの評価

学期最後の授業時に、SAに対する評価を問うためのアンケートを、受講生(吉永プレップ・深尾プレップ合同で41人からの回答を得た)を対象に行った。その内容と結果は次の通りである。

4.1. SAの必要性について

質問項目は5つ設定した。その1問目は、プレップセミナーにSAをつけることについて、「5. とても必要」「4. 必要」「3. どちらでもない」「2. あまり必要ない」「1. 全く必要ない」の5段階で評価してもらうものである。

回答の割合は、5:15%、4:59%、3:24%、2:2%、1:0%であり、平均点は3.88であった。3問目の自由記述欄における「先生には聞けないような分からない内容でも、SAがつくことで安心して質問ができて助かった」、「とても話しやすい雰囲気を持っているんだと思った」といった意見と合わせて推測すると、話しやすい「先輩」という立ち位置にいたことで、受講生の間にも親近感がわき、受け入れられていたことがうかがえる。

4.2. 授業内容の要約の投影について

2問目では、授業の要点をプロジェクターで投影したことについて、「5. 大変有用」「4. 有用」「3. どちらでもない」「2. あまり有用ではない」「1. 全く有用ではない」の5段階で評価してもらうものである。

回答の割合は、5:15%、4:54%、3:20%、2:10%、1:2%であり、平均点は3.68であった。

3問目の自由記述欄では「聴き逃したところがあったも、プロジェクターに要点がまとめてあるので、それを見ればやるべきことが分かって助かった」との意見もあり、聴覚障害をもつ受講生以外にとっても効果的であったことがわかる。

4.3. よかった点・要望に関する自由記述

3問目はSAから受けたサポートについて、良かった点及び改善すべき点を自由記述で回答してもらうものである。61%の学生が何らかの記入をしてくれた。良かった点としては、「分からない時に自然とアドバイスをくれた」、「疑問点を経験に基づいて教えてくれるのでとても助かった」などが挙げられた。これに対して改善点・要望点としては「各課題に対して『自分ならこうする』などの

自己解釈を提供してほしかった」などの意見があった。SAに対して、法学の内容に関する具体的なアドバイスを求める声もあることがうかがえる。

4.4. アドバイザーへのメッセージ

4問目ではSAへのメッセージを自由記述で回答してもらうものである。これには76%もの学生が何らかの記述をしてくれていた。メッセージとしては、「春学期間、ありがとうございます」、「今までお疲れさまでした」、「これからも頑張ってください」、「適度なアドバイスやヒントを下さりありがとうございます」というものがあった。「先輩」である学生アシスタントだからこそ、親しみを込めた言い方でコメントをしてくれたのではないかと思うと、嬉しくなる。

4.5. キャリファシとの相違

5問目では、プレップセミナーと同じ1回生春学期に開講された「自己発見と大学生活」の受講生を対象に、その授業におけるキャリファシとプレップセミナーにおけるSAの共通点・相違点について、気がついたことを自由記述で回答してもらうものである。合同クラス全体の37%にあたる15人から回答を得た。

共通点としては、「教師よりも親しみやすかった」、「学生の目線で考えてくれる」などがあげられた。また相違点では、「キャリファシはみんなが仲良くなるための様々なゲームを考えてくれた。アシスタントは知識を沢山持っているという印象だった」、「自己発見のほうが賑やかだった」、「自己発見の方はキャリファシが前でマイクをもってなにかを行うので親近感がより沸いた」などの意見が出された。

5. SA制度構築にあたっての課題

このように、受講生の間でもSAは一定の支持を集めたといえる。では課題はないのか。ここでは私自身の半年間の経験に基づいて、以下4点を提起したい。

5.1. 「ファシリテータ」としての研修の重要性

最も重要なことは、SAは受講生を支援するときに、決して「アドバイザー」になってはいけないということである。先輩学生がSAとして活動する際には、それぞれに「受講生のために」という思いをもって活動に力を入れると思う。それは大切なことである。しかし、それが「1回生はこうすべき!」「こうしてほしい」というような、受講生に対する押し付けになってしまっているといけないということ

である。

受講生たちが、これからどういう学生生活を行っていくか、その答えは彼ら・彼女ら自身で見つけることが大切である。SAの役割はそれをアシストすることにとどまる。

例えば、受講科目の選択に迷っている後輩が、「簡単に単位が取れる授業ってないですかね?」と問いかけてきた時に、「大学生は勉強すべきだ。簡単な授業なんて受けるべきじゃない!」という自分の答えを頭ごなしに押し付けてはいけない。「なぜ、簡単な授業がとりたいのか」などと、まずは受講生の考えを肯定し、受講生がその思いに至った過程を知るために掘り下げた質問を繰り返し、そしてその受講生に「ああ、自分はこういうことを思っていたのか」という「気づき」を経験してもらうことが必要である。

しかし「簡単な授業を教えて」という学生に対しては、私自身もまずは「そんなことを言わないでしっかり勉強してほしい」と思ってしまう。「指示型」ではない「支持型」のSA像は、キャリファシ研修などを通じてイメージできるようになったものである。

研修では、サポートの具体的な方法なども扱われており、そのお陰で私は今回の法学部プレップセミナーでもクラスにうまく溶け込むことができた。全く未経験の状態でアシスタントになっていたなら、上手くいかなかったのではないかと思う。

5.2. 信頼関係の構築

第2に、すでに何度か記述していることだが、SA活動を行う上で必要不可欠になってくるのは、アシスタントと受講生の間、あるいはアシスタントと教員の信頼関係を構築することである。

このうち担当教員との信頼関係ということについては、私自身が2年前に吉永先生のプレップセミナーを受講し、授業の進め方や先生の人柄がわかっていたことが、大きなプラスとなった。こういう背景がないときに、SAと教員の間で、授業のイメージをどう共有し、信頼関係をどのように築いていくかは課題の1つになると思う。

そして、授業でアシスタントを行う中では、受講生との信頼づくりも大切である。そのために、例えば担当教員とは違った親近感のわく「先輩」としての立ち位置を、自分の中で確立しておくことが最も重要である。

5.3. 教えられる内容についての専門知識

第3に、SAにどこまで学問的な(例えば法学部なら法学についての)専門性を求められるのかということも考えるべきである。

今回のSA活動では、学問的な専門性はあまり求められていなかったが、先述(4.3)のアンケート結果でもふれた通り、受講生の中からは、もっと学問的な専門知識をもって対応してほしいという意見もあがっている。担当SAがどのような支援をするのか、それによっては、SAの存在意義、在り方も変わってくるであろう。

そして、学問的な専門知識も求めるのであれば、上記のファシリテータとしての専門知識とともに、研修で身につけさせることが必要である。

5.4. SAを用いる授業の規模

最後に、SAをどの規模の授業で用いるかという問題がある。

学期前半では、30名弱のクラスに、SAと教員が1名ずつついていた。この規模だと、受講生とSAの双方の間で顔と名前が一致したり、1人1人との接点が増えたりと、非常に充実した支援が可能である。

学期後半は2クラス合同であったが、それでも、受講生は40名強、担当教員が2名、SAが1名という態勢であった。担当教員とSAの3名の連携がうまくいったこともあり、人数が増えたからやりにくいと感じることもなかった。

しかし、受講生がこれ以上多くなったり、100人に近づいてくると、SAと受講生との間で信頼関係を構築しにくくなったり、接点が薄まってしまったりする恐れがある。そしてキャリアファシとしての経験からすると、受講生が100人になるような規模の大きい授業で、仮にSAを2名に増やしたとしても、SA 1名対受講生100名の関係が2つ存在するだけで、結局のところSAと受講生の信頼関係は構築されにくいと考える。

SAをどの規模の授業で活用するかについても、慎重に検討すべきだと考える。

6. むすび

最後に、私自身がSA活動を通して思うことを述べて、むすびとしたい。

SAの活動は受講生支援である。今回SAとして参加したプレップセミナーのような法学部の1年次専門科目であれば、法学部の1年生を支援するのが目的である。SAはつい1～2年前に受講生たちと同じような不安や悩みをもっていた「先輩」であり、そうした立場で1年生をサポートすることが不可欠である。

SAとしての活動を始めるにあたって、私は初年次教育の授業にSAが入ることで、1年生の段階でつまづいてし

まう学生を少しでも減らしたいと思っていた。それは今でも変わらないが、今ではさらに、1年生が、私のようなSAの活動を見て、そこに彼ら彼女らが大学で身につけて行くべき「なにか」(付加価値)を見出してくれればと願っている。

もちろんそのためにはSA自身が、自分達の活動をしっかり意味付けすることが前提である。そのために、「受講生にとって最適のサポート」の在り方について常に考えるべきであると思うし、担当教員とSAの間で何度も話し合う必要がある。

今後もSA活動がさらに広まり、重要度が認識されるように活動を続けていきたい。

注

1) キャリア形成支援科目「自己発見と大学生活」で受講生のサポートを行う学生ファシリテータ。その活動については松尾智晶「キャリア教育の効果と京都産業大学における新たな試みに関する一考察」高等教育フォーラム2号(2012年) 17頁[20-21頁]を参照。

2) ACはAcademy Co-Creating Committee (大学共創委員会)の略。大学の教育改善について考えることを目的とした学生団体で、2011年6月に発足した。その活動については林隆二=乙倉孝臣=山内尚子=中沢正江「共創風土を醸成する「燦presents『京産共創』プロジェクト」—学生を中心としたOrganization Developmentの取り組み—」高等教育フォーラム2号(2012年) 91頁以下を参照。

3) 渡邊大介=吉永一行「学生による学部教育活性化のための活動(その1) 学生履修アドバイザー」高等教育フォーラム2号(2012年) 75頁を参照。

KEYWORDS: Specialized education, Students support, Student assistant (SA)

2012年11月30日受理

†Kotone ITO*, Kazuyuki YOSHINAGA**： Experimental

Introduction of Student Assistants into Law Faculty Prep-seminar

*Faculty of Law, Kyoto Sangyo University, Motoyama, Kamigamo, Kitaku, Kyoto, Japan 603-8555

**Faculty of Law, Kyoto Sangyo University, Motoyama, Kamigamo, Kitaku, Kyoto, Japan 603-8555

